

# 國學院大學學術情報リポジトリ

その、あまりにも二項対立的な(続続)：  
司馬遼太郎の歴史観を読む

|       |                                                                                                         |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2023-02-06<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 矢吹, 省司<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.57529/00001187">https://doi.org/10.57529/00001187</a>                       |

## その、あまりにも二項対立的な（続続） ——司馬遼太郎の歴史観を読む

矢吹 省司

Extremely Dual（Ⅲ） ——A historical view of Shiba Ryotaro

Yabuki Shoji

キーワード：自己嫌悪 自虐史観 自分を愛すること スポーツ観戦  
歴史性としての人間性

### カッコヨサにあこがれて

自分は自分であることをやめられない。だから自分が嫌いだったら、それはもう本当にどうしようもない。嫌いな他人からは逃げられても、嫌いな自分からは逃げられない。（実は嫌いな自分から逃げる方法がないわけじゃないが、しかし逃げてばかりいたら確実に心を病む。）だから心地よく生きてゆくには自分を好きになるしかない。とはいえ心がけ次第で自分が好きになれるわけでもない。

ではこの自分嫌いはどうにもならない感情なのか。いやそうとも限らない。そもそも自分嫌いは自意識のしるしである。たとえば小説を読んで楽しむ人の心中には自分嫌いの感情が底流する。100%自己受容できる人間がいたとして（いるはずがないが、いたとして）、そういう人間は小説を読みたい気持ちにならない。そもそも他人に同一化<sup>アイデンティファイ</sup>する必要性を感じないのだから、小説の空想世界に入り込んで他人の人生を生きて楽しむようなこともない。《ここ》で満ち足りているんなら《あっち》へ行く必要はない。

こうして見ると、国民作家の司馬遼太郎が小説読みの動機として自己嫌悪の感情に着目したのはうなずける。司馬は『峠』のあとがきで創作の秘密のようなことを打ち明ける。

「明治後のカッコワルイ日本人が、ときに自分のカッコワルサに自己嫌悪をもつとき、かつての同じ日本人がサムライというものをうみだしたことを、思いなおして、かろうじて自信を回復しようとする。」

司馬によると、戦国期の日本にはこのようなカッコイイサムライはいなかった。江戸期が到来して降るにつれ、日本人は少しずつ変わっていったが、中でも武士階級は読書階級、教養階級になり、形而上的思考法を発達させた。そして物欲や名誉欲のような形而下的欲望ばかりに駆られない人間、つまりどう行動したら美しいとか、どう行動したら公益のためになるかと自問するような人間が誕生した。それが世界的に知られるようになった日本のサムライである。司馬遼太

郎はそういうサムライを「人間の芸術品」「美的人間」と絶賛し、その典型を河井継之助という人物に求めた。

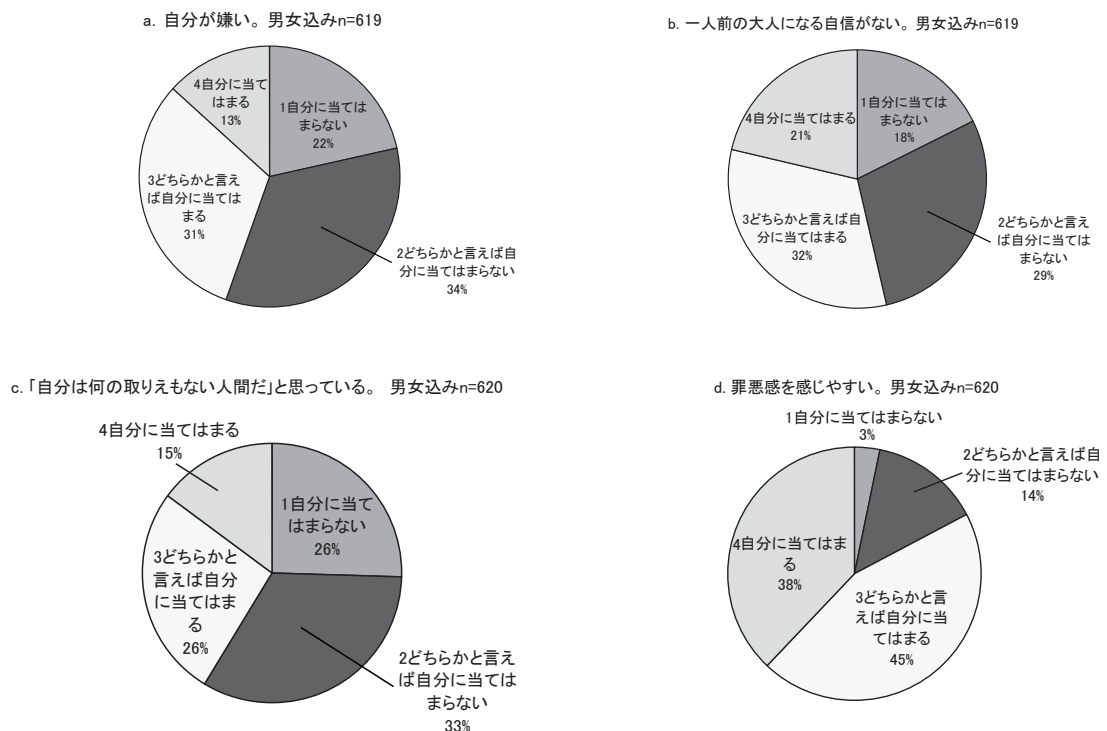
「その典型を越後長岡藩の非門閥家老河井継之助にもとめたことは、書き終えてからもまちがっていなかったとひそかに自負している。」

河井継之助は陽明学の学徒であった。司馬が言うに、陽明学は「世を済<sup>すく</sup>う」ことを唯一の人生の目標とする学問であった。陽明学の学徒は世のため人のために自分の生命を一個の道具のように扱わなければならなかった。司馬は河井継之助をそういう学徒の一人として、つまり藩のため人民のためひたむきに粉骨砕身する人間、「人間の芸術品」「美的人間」として描いた。

現代のカッコワルイ日本人がそのカッコワルサに自己嫌悪を覚えたとしても、かつてこの日本に継之助のようなカッコイイサムライがいて、大活躍をしたことに思いを馳せれば、何とか自信を回復することもできるだろう。そう司馬は説いたのである。

自己嫌悪が日本人の言わば国民性の一種であることは、すでに様々な研究によって明らかにされている。たとえば芝伸太郎氏は『日本人という鬱病』で、勢古浩爾氏は『ああ、自己嫌悪』で、古荘純一氏は『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか』で、それぞれの立場から日本人に著しい自己嫌悪について考察している。私も2006年に大学生を対象に意識調査を実施して同様の傾向をうかがうことができた（図1）。

図1 大学生を対象とする自分に関する意識調査の結果の一部



司馬遼太郎は継之助のようなカッコイイ「日本のサムライ」を描くことで、自己嫌悪に傾きがちなカッコワルイ日本人を元気づけようとしたのである。

それは見事に成功した。歴史家の福井雄三氏などは司馬の小説を読んだときの感動に触れて言う。

「何を隠そう。この私自身、学生時代に司馬氏の作品を読み取り、日本の近現代史を雄々しく生きてきた父祖の足跡を辿りながら、『戦前の日本社会は全てが悪であり、間違っていた』という従来のいわゆる自虐史観とは異なる彼の著述に、心の洗われるような新鮮な感動を覚えたものである。（『坂の上の雲』に隠された歴史の真実』）」

1953年生まれの福井氏は日本が嫌いで嫌いでたまらなくなるような歴史教育を受けたという。それで司馬の小説を読んで心を洗われるような新鮮な感動を覚えたそうだが、さもありなん。作者の司馬のねらいがまさにそこにあったのだから。

### 異胎の40年、魔法の森の20年

自己嫌悪を煩うカッコワルイ日本人だって幕末維新のサムライ群像のカッコヨサに触れれば、何とか自信を取り戻すこともできるだろう——こうした思いが、司馬には創作動機の一つとしてあった。

では一体いつのころから日本人はカッコワルクなったのか？ 司馬によると史上最高にカッコイイ日本人が幕末維新に活躍したサムライなら、最低最悪のカッコワルイ日本人は、日露戦争に勝利した1905年（明治38年）から太平洋戦争に敗北した1945年（昭和20年）までの40年間「調子狂い」を演じた日本人である。つまり日露戦争の勝利がその後の40年間、日本と日本人をおかしくしてしまったというのである。この40年を、司馬は「異胎の40年」と言う。あるいは「鬼胎の40年」とも言う。

この異胎（鬼胎）との遭遇を、司馬は「夢だったのかどうかは、わからない。ともかくも山を登りつづけていて、不意に浅茅ヶ原<sup>あさじ</sup>に出ってしまった」と語り出す（『この国のかたち』）。そこには「巨大な青みどろの不定形なモノ」が横たわっていた。両眼は金色に光り、爪はささくれ、口中の牙は折れ、皮膚は粘膜質にぬめっていた。そのモノ、異胎はわずかに息づきうごめくばかりで、自力で人里に出ることはできそうになかった。「君は何かね」と聞くと、その異胎は「日本の近代だ」と答え、さらに「おれを40年と呼んでくれ」と言った。

「歴史もまた一個の人格として見られなくもない。日本史はその肉体も精神も、十分に美しい。ただ、途中、なにかの変異がおこって、遺伝学的な連続性をうしなうことがあるとすれば、『おれがそれだ』

と、この異胎はいうのである。」

このように司馬は近代の一時期を「異胎の40年」と呼称して、日本の歴史から排除しようとする。なるほど。これが世に聞こえた司馬史観か。一国の歴史から特定の時代を「異胎の40年」として

そぎ落とす。歴史をどう読み取ろうと個人の自由だが、司馬のこの読み取り方はあまりに無茶だ。もとより人間の歴史はしぶとくて、めったにその連続性を失わないものだ。

司馬の歴史観の背景には彼が少年期と青年期を過ごした時代への嫌悪がある。司馬によると日本は日露戦争に勝利して形相を一変させた。以来40年間の、何とも薄気味悪い「異胎」「鬼胎」の時代になった。

「日本史的日本、を別国に変えてしまった魔法の杖は、<sup>とうすいけん</sup>統帥権にあった」という解釈が司馬史観の根本である。内閣からも陸軍大臣からも独立した統帥権という超憲法的な思想を、参謀本部が持つようになって以来、日本の国は「異胎の40年」「40年の魔の季節」に入ってしまった。特にその後半の昭和元年（1926年）あたりから敗戦（1945年）まで、日本はすっかり魔法をかけられて「魔法の森」になってしまった。いずれにせよ、これら「異胎の40年」や「魔法の森の20年」の間に、日本人の日本人らしからぬ「調子狂い」、愛国的自我肥大、リアリズムの喪失が進んだ、と司馬は言う。

日露の講和条約に反対する国民大会

日比谷焼き討ち事件

植民主義、帝国主義の高揚

日韓併合

シベリア派兵

統帥権干犯問題

ノモンハン事変

日中戦争

太平洋戦争

こうしたことが続いて、ついに日本は1945年の8月15日に敗戦を迎えることになる。司馬はこの時22歳であった。後に自ら「魔法の森」と称することになる「20年」を生き終えたころのことである。

### 「あれは日本だったのだろうか」

その前年の1944年に司馬は満州の陸軍戦車学校を卒業し、敗戦の直前には本土決戦に備える見習士官として栃木県佐野市にいた。帰国して日本にいながら司馬は奇妙な思いに駆られた。自分が今身を置いているこの国は本当に日本なのか疑わしくなった。「日本や日本人は、むかしから今のようなぐあいだったのか」、「昭和という時代だけがおかしいのではないか」と思ったりした。司馬の特殊な歴史観の根底にあったのは彼が敗戦前後に抱いたこうした思いであった。

こうした思いは終生変わることがなかった。1986年の談話（『昭和』という国家）でも、「（昭和元年から20年までの）話をしていると、だんだん覇気がなくなってきました」と言っている。「私もその時代の末端に属していながら、青春が末端に属していながらですね、そして同じ民族

でありながら他民族の話をしているようです。そして、いまだに思うことはひとつです。あれは日本だったのだろうか。」

人は普通自分が生まれ育った時代に多少とも愛着を感じるものだが、司馬はそれを嫌悪してやまない。この嫌悪感の裏返しが「『日本』への郷愁」であった。司馬は敗戦の前の年に日本へ帰ってきたが、そこに日本はなかった。自分が生まれ育った国は非日本になっていた。いやこの国はずうっと非日本であった。それで「日本」がなつかしくなった。

なつかしい「日本」、それはサムライたちが活躍した幕末維新の日本のことであった。そして司馬は（再度の引用になるが）「明治後のカッコワルイ日本人が、ときに自分のカッコワルサに自己嫌悪をもつとき、かつての同じ日本人がサムライというものをうみだしたことを思いなおして、かろうじて自信を回復しようとする」と考えるようになった。つまり司馬は自己嫌悪（「自分はカッコワルイ」という思い）を抱く人々を慰める方法に想い到ったのである。

司馬の幕末維新物は確かにおもしろい。カッコイイサムライに一時感情移入して、そのカッコイイ活躍ぶりを追体験できるから「おもしろい」と感じるのである。さすがは国民文学者のわざだ。すごい。圧倒的な力量だ…と思うが、何かおかしいとも思う。

司馬の歴史観は読者を自己嫌悪へ追いやりかねない。自分に親しくつながる父祖の世代を気持ち悪い異胎や鬼胎<sup>たと</sup>に喩え、彼らを魔法の森をさまよった愚者の群れと決めつけ、また他国に迷惑ばかりかけた非道の輩として執拗に責めたてるのをまともに聞いていたら、誰だってイヤなっちゃう。そんな歴史観のオピニオンリーダーである司馬遼太郎から今さら「かつての同じ日本人がサムライというものをうみだしたことを思いなおして、かろうじて自信を回復しようとする」なんて言われたって、どうにも仕方がない。

司馬史観は自虐的であるばかりが自閉的でもある。「異胎の40年」にしる「魔法の森の20年」にしる、それは日本の歴史というよりはむしろ世界の歴史であったのだ。こんなことは子どもだって分かる。

NHKの「週刊こどもニュース」のお父さん役として活躍した池上彰氏に聞いてみるといい。

「1929年の世界恐慌の際には、景気の悪い状態が長引き、人心は荒廃。国家間の関係も悪化して、遂に第二次世界大戦に突入しました。戦争を起こしたことで、世界は恐慌から脱しました。大量の武器弾薬を製造し、破壊された都市を再建するために大規模な公共事業が必要になったからです。とてつもない無駄遣い、をすることで、やっと恐慌を克服したのです。／しかし現代では、戦争で恐慌脱出というわけにはいきません。平和なままで恐慌から抜け出すには、地道に金融不安解消に努めるしかありません。（『14歳からの世界金融危機』）」

以上が歴史の真実であり、政治経済の真実である。日本だけが「魔法の森」の中をさまよったのではない。アメリカに始まる経済恐慌をきっかけにして世界中がほとんど必然的に巨大な悲劇に巻き込まれていったのである。

## 二項対立的な歴史観——自虐

昭和が始まってから敗戦までの20年間の日本が何か凄まじい悪意によって突き動かされていたとしたら、その悪意の最大の原因はアメリカ発の世界恐慌にあった。

文字通り世界中が恐慌した。人心は荒廃し国家間の関係は悪化の一途をたどった。日本だけが「魔法の森」へ迷い込んだのではない。司馬遼太郎が何と言おうと、断じて日本だけが「魔法の森」へ迷い込んだわけではない。

司馬遼太郎の歴史観はどうあれ、彼の歴史小説はおもしろい。それを読んだ多くの人が福井雄三氏同様「心の洗われるような新鮮な感動」を覚えたのである。その福井雄三氏が自分の経験から歴史教育について言う。

「私は今でも鮮烈に思い出す。私自身の高校時代、社会科の教師たちはまるで何かの熱に浮かされ陶醉したかのように、戦前の日本の社会の暗黒ぶりや、戦時中の日本軍の残酷行為などを、これでもかこれでもかとばかりに、口を極めて罵倒していたものであった。彼らの授業を聞いてみると、戦前の日本の社会はあたかも法治国家ではない、無法の暗黒社会であったかのような錯覚をすら抱いたものである。」

私は素人なりに歴史を勉強しているが、戦前の日本社会が「無法の暗黒社会」だったなんてとても信じられない。どんな社会にも光と闇がある。光り輝く地上の楽園が幻想なら、闇に覆われた無法の国家は一面的な解釈の産物である。いずれにせよ戦前の「社会の暗黒ぶり」や「軍の残酷行為」が日本の専売特許であろうはずはない。それは時代的・世界的な現実の（もっと言えば普遍的現実の）一面としての悲劇であった。

しかし司馬遼太郎は日本だけが悪かったようなことを言う。日露戦争に勝利して「異胎の時代」に入ると日本は一変して「帝国主義的な国」になってしまったと言う。

司馬は「帝国主義という言葉は上等ですね、泥棒主義と言ってもいい」と、日本を揶揄する。日本は実に恥ずかしい、いかがわしい、くだらないことをいろいろとする国になってしまった、とまで言う。

「要するに、日本はヨーロッパの近代を買い続けてきて、江戸期の合理主義思想とは無縁で育ってきました。」

「とにかく明治政府というものは江戸期を否定し、そして明治以後の知識人は、軍人を含めて、江戸的な合理主義は持たなかった。それはやはり、何か昭和の大陥没とつながるのではないだろうか。」

私は歴史はずぶの素人なので、ぜひ教えていただきたい。当時近代的な軍事力を備えた列強で帝国主義的でなかった国はあったのだろうか？ 泥棒主義にあらざる上等な帝国主義って、一体どんな帝国主義のことですか？ 日本は江戸期の合理主義思想と無縁で育ってきたって、本当ですか？ 江戸期の合理主義を生かし生かしやってきたら、近代日本は地上の楽園にでもなったんですか？ ぜひ知りたい。

司馬は日本の近代の一時期を「異胎」とか「鬼胎」とか、さらには「魔法の森」といった表現で象徴して、日本史から消し去ろうとする。ともかくもその一時期の帝国主義をくそみそにけなす。一方イギリスやフランスなどの西欧の帝国主義はほめあげたりもする。なぜか？ 不思議だ。イギリスやフランスの暴虐が日本の比ではなかったという事実はどう見たらいいのか。すごく不思議だ。司馬遼太郎の博覧強記を信じているだけに、不思議でたまらない。

司馬遼太郎のファンは彼の小説（司馬文学）を読んで福井氏が感想したように「従来のいわゆる自虐史観とは異なる彼の叙述に、心の洗われるような新鮮な感動を覚え」るのだが、いつのまにか司馬の歴史観によって裏切られ、気がついたらみずから自虐史観に馴染んでいる。

司馬文学と司馬史観を全体的に見渡して受ける矛盾の印象は、司馬という作家の物の見方があまりにも二項対立的であることに由来する。この論文の前編で論じられたように司馬文学は極端にカッコイイ人間と極端にカッコワルイ人間を二項対立的に物語る。また司馬史観は極端にイイ時代と極端にワルイ時代を二項対立的に記述する。

幕末、維新、そして日露戦争の勝利に至るまでの明治期——これが司馬史観によると最高にイイ時代である。このイイ時代に登場して活躍するサムライが最高にカッコイイ「人間の芸術品」「美的人間」である。しかしその後がよくない。日本の歴史と認知されないぐらいワルイ時代になる。時代の様相ががらりと変わり、英傑の人に入れ代わるように「調子狂い」の連中が登場して、この国を支配するようになる。ホップ・ステップと飛び跳ね、最後に滅茶なジャンプをして墜落する。

## 自己への愛、他者への愛

絶大な人気のある国民作家の歴史観だけに、その影響力はものすごい。外交評論家の岡本行夫氏は産経新聞で司馬史観に触れ、こんなことを言っている。

「軍部が指導した昭和から終戦までを、司馬遼太郎氏は日本がさまよいこんだ『魔法の森』と呼んだが、その時代の軍国主義を別にすれば、近代に至る日本の文化と国民性には素晴らしいものがあつた。世界に誇れる歴史である。」

岡本行夫氏ほどの人でも愛国心を吐露する時には司馬史観に触れないわけにはいかないようだ。「魔法の森」について、さらにこうも言っている。

「『魔法の森』の時代への評価が定まらないので、多くの学校では日本の近現代史について教育がなされない。従って子供たちにとって『歴史』とは明治までの『過去の事象』であって、現在進行形の日本の背骨とは受け止められていない。」

岡本氏自身の「『魔法の森』の時代への評価」が今一判然としないが、言いたいことはよく分かる。岡本氏はウクライナの首都キエフのある中学校での授業を参観して、またウクライナの学習指導要領の一節「自然を描写して気持ちを表す日本人の国民性を学ぶことにより、ウクライナとは違った文化をもつ日本と日本人に対する尊敬の念を養う」や、前ウクライナ大使の馬淵睦夫氏の『外交フォーラム』での主張「ウクライナは自らの文化を大切に、誇りを持っているから

こそ、他国の文化に対して関心を持ち、尊敬の念を持つことができるのである」を読んで、**自国の歴史を愛せない者は他国を愛することもできない**というような確信を得た。これはまったく正しい。自分自身への愛と他人への愛の関係についても同様のことが言える。

**自分を愛せない人は他人を愛することもできない**ということは、筆者が得た統計でも明らかである。《自分が嫌いだ》と、

《人間嫌いだ》の相関は0.39、

《行き場のない怒り、恨みを抱いている》との相関は0.33、

《意地悪な性格である》との相関は0.32、

《疑い深い》との相関は0.32、

《人を許し受け入れる度量が小さい》との相関は0.22、

《殺したいほどある人を憎んでいる》との相関は0.21である。以上いずれも統計的に十分有意な相関である。

自己を愛して他者を嫌うのではない。自己を嫌って他者を愛するのでもない。要するに自己を愛せないようでは他者を愛することもできないのである。**自己を愛してこそ他者を愛することができる**のである。（ここでいう「自己への愛」はナルシズムでもエゴイズムでもない。人格の未熟さや狭量さではない。）

このことはおそらく経済評論家の勝間和代氏の「利己と利他の循環」という考え方とも重なるように思う。辞書的には、利己は「自分の利益だけを大事にし、他人のことは考えないこと」であり、利他は「自分を犠牲にしても他人の利益を図ること」である（『電子大辞林』）。しかし利己も利他も実際にはそのようには成り立たない。少なくとも長続きしない。勝間氏が言うように、利己的な目標を設定して運よく達成できたとしても、それが利他につながり「他人のため」にならなければ、一瞬の満足感で終わってしまい幸福感は得られない。また逆に「他人のため」に自分が幸せにならないような努力を続けても、苦行になるばかりである。「他人のため」(他人への愛)と「自分のため」(自分への愛)は循環して両立するのである。

## スポーツ観戦の効能

人は自分への愛ゆえに、ごく自然に自分が生まれ育った国を愛し誇りに思う。国際スポーツを観戦して興奮を感じるゆえんである。ユング心理学の河合隼雄氏は長野冬季オリンピックをテレビで見てスポーツ観戦の効能を説く。

「私は心を病む人たちに多くお会いしている。そんなときに、オリンピックに出場する選手が、いかにそのような人に勇気を与え、時には痛手を癒すほどの力をもっているかを痛感させられる。／もう駄目というところからの逆転がある。長い長い努力が一瞬のミスで帳消しになり、選手が泣きくずれる。しかし、しばらくするとまた新しい気持ちで次に挑戦する姿が見られる。これらの姿を見て、悩み苦しんでいる人たちがどれほど勇気づけられ、救われているか計り知れないも

のがある。／私はかつて、冗談半分であるが、私のように一人の人にながながと面接をくり返している者よりも、スポーツ選手の方が、どれほど効果的な心理療法家であるかわからない、と言ったことがある。彼らはその一挙手一投足で、何百万人の人にはたらきかけているのだ。人間の心にとって、感動することほど素晴らしい成長剤はないのだ。」

オリンピックのような国際試合を観戦してまず感ずるのは、超一流の技と技、力と力のぶつかりあいのすごさである。そこに日本の選手が出ていれば当然、その選手を応援する。勝てばうれしい。優勝して日章旗が上がればすごくうれしい。

長野冬季オリンピックは少々昔になったが、北京オリンピックのことはよく覚えている。特にソフトボール競技の決勝戦が脳裏に浮かぶ。何と常勝チームのアメリカと戦って日本が勝ったのだ。上野由岐子さんの活躍ぶりがすごかった。上野さんは準決勝、3位決定戦、そして決勝戦と3試合を通して一人で投げ切った。そんな上野さんを支えてチームの仲間が超ファインプレーを連発した。それに応えて上野さんは粘りに粘った。アメリカを下して奇跡的な優勝を決めた時にはチームのみんなと一緒に日本中が泣いた。河合隼雄流に言えばあの感動の涙は規模壮大な治療効果を発揮したにちがいない。誰だって多かれ少なかれ心を病んでいる。その病みを上野由岐子さんたちは身をもって癒やしてくれたのだ。

あの試合は負けたら負けたでよかったのだ。死力を尽くして戦ったあとは、たとえ負けても胸を張って堂々とすればいい。別種の感動を呼び起こしたことだろう。

オリンピックのようなビッグな試合でなくたっていいのだ。ローカルな高校生の試合だっていい。正々堂々と戦って一生懸命応援して勝っても負けてもみんなで泣く。それでいいのだ。若い人たちはそんな経験を重ねながら自己と他者の関係性を拓き、人間性を開発する。そして《汝の隣人を愛せよ》の心を陶冶するのだ。

### おもしろいことには危険がいっぱい

改めて言うが、人はごく自然に自分の生まれ育った国を愛し誇らしく思う。だから自国の歴史が（自国の歴史だけが）悪にまみれていると思いきまされると、自国への愛や誇りが傷つく。悪くすると自国への嫌悪感がつのり、結果的に他国への親愛の情が深まらない。ちっともいいことがない。

だから二項対立的な善玉悪玉二元論で歴史をみるようなドラマチック歴史観はやめてほしい。日本の特定の時代を「異胎（鬼胎）の40年」とか「魔法の森の20年」とか呼んで、日本のことではなくて「別国」のことであったとするなんて、何とも情けない。

司馬文学は日本人のナルシズムを満たすのに奏功して、エンターテインメントの頂点をきわめた。もちろんナルシズムを満足させちゃいけない法はない。ナルシズムは自己を愛し受容する力の成熟のために、なくてはならない大切な心的資源である。もっとも何かをナルシスティックにおもしろがるということには、危険もある。なぜなら人には、そういうおもしろい何

か<sup>へき</sup>を無批判に受け入れる癖があるから。

とにかく司馬の幕末維新物はおもしろい。おもしろいものはひたすらおもしろがっていいのだ。ナルシズムをマゾヒズムに変質させちゃいけない。

私は歴史の専門家ではないので司馬史観を歴史学の視点から批判するのは難しい。しかし司馬の小説を楽しみながら司馬ワールドにもぐりこみ、その内側から司馬史観の問題点を洗い出すことぐらいはできると思う。

人間は歴史的存在である。そもそも人間性とは歴史性のことである。だから本気で人間開発を志すのなら歴史の一部を切り捨てるような歴史観に甘んじちゃいけない、と言いたい。

## 文献

司馬遼太郎『この国のかたち』文春文庫版1993

司馬遼太郎『「昭和」という国家』NHKブックス1999

司馬遼太郎『峠』新潮文庫版2003

福井雄三『「坂の上の雲」に隠された歴史の真実』主婦の友社2007

古荘純一『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか』光文社2009

池上 彰『14歳からの世界金融危機』マガジンハウス2009

勝間和代『「自分」と「相手」のバランス』産経新聞2009.11.21

河合隼雄『こころの処方箋』新潮社1998

岡本行夫「歴史は『現在進行形』」産経新聞 2008.12.30

勢古浩爾『ああ、自己嫌悪』PHP新書2005

芝伸太郎『日本人という鬱病』人文書院1999

矢吹省司「その、あまりにも二項対立的な（統）——司馬遼太郎の小説を読む」國學院大學教育学研究室紀要・第43輯2009

（やぶきしょうじ・國學院大學人間開発学部初等教育学科教授）